

戦死・心に傷 若者が犠牲に

一番国を愛している人は命を大事にする人であって、人を殺す人ではない

伝えたいこと 戦後74年

上

兵役を拒否した1955年当時の米国には徴兵制があった。朝鮮戦争が休戦を迎え、ベトナム戦争が本格化する前で、戦場に送られる可能性は低かった。だが、国民の義務だった徴兵登録の際にあえて兵役を拒んだ。親とも相談せ

山梨英和学院理事長

ジョージ・

ギッシュさん (82)



ず、1人で決断した。

兵役を拒否すると「非国民」のように見られた。

手続きで訪れた地域の徴兵局では3人の面接官から詰問された。「小さい頃はペーパードール(善せ替え人形)で遊んだのかい」。非難中傷が続き、「この国を愛せなければ、よその国へ行け」とまで言われた。

「一番国を愛している人は命を大事にする人であって、人を殺す人ではない」。心の

中でそう自分に言い聞かせ、じっと耐えた。

何が18歳の若者を突き動かしたのか。「育った環境があるのかもかもしれない」と振り返る。

7歳のころ、家の近くの基地が一般開放された日に衝撃的な光景を見た。敷地の一角に立ち入ると檻の中に人影があった。走り回ったり、格子をよじ登ったり、叫びとも、うめきともつかない声を発していた。戦場で精神に支障を来した捕虜兵だった。

弟も一緒に3人で遊んだ若い空軍兵士が日本へ出撃後、戦死したことも悲しい思い出だ。「戦争では若者も犠牲に

なる。誰が喜ぶのだろうか」

来日後、日本人と結婚。妻の兄は終戦間際、ビルマ(現ミャンマー)で戦死していた。「戦争ではどちらが加害者、被害者とは言えない。その両方だ」と実感する。

人種差別、偏見、恨み、いじめ……。「小さな戦争は毎日ある」と指摘する。相手の痛みを知ろうとしなければ人は過ちを繰り返す。「平和とは互いに信頼関係を築き、違いを乗り越えて一緒に生活すること」と信じる。

偏見に気づかせることも教育の役割だ。「憎しみや恐れがあるからといって復讐してもいいんですか」。そう問いかける。

「原爆や空襲を受けた日本が平和づくりのために一丸となれば世界のリーダーになれる。私は次世代にも希望を持っている」(平畑洋)

ジョージ・ギッシュ 1936年、ドイツ系移民の子孫として米カンザス州に生まれる。米国に徴兵制があった18歳のときの徴兵登録で「良心的兵役拒否」をする。2年に及ぶ米連邦捜査局(FBI)の身辺調査の末、州の裁判官から許可を得る。兵役に代わる奉仕活動のため、1958年にキリスト教メソジスト派の宣教師として来日。名古屋学院中学・高校の英語教師などを経て、青山学院大教授として「日本文化史」を教える。2016年、山梨英和学院の理事長に就任。著書「ワンダフル ディファレンス」では、民族などの違いを超え「地球人」として生きることを説く。

戦争から何を学び、教訓とするのか。終戦から74年。戦争と向き合い、考え続けてきた山梨ゆかりの3人に、平和な世界をつくるために「伝えたいこと」を聞いた。